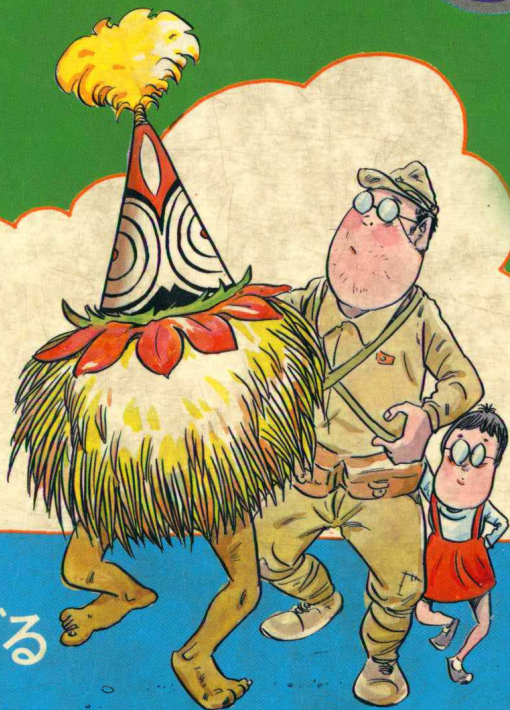


娘に語る
お母さんの戦記

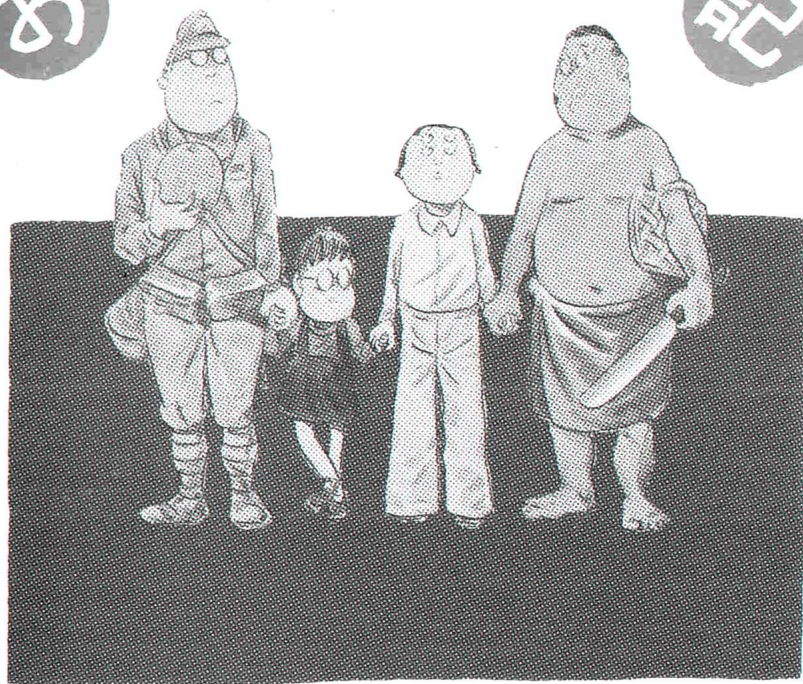
小さな天国の話

水木しげる



娘に語る
お父さんの戦記

国の語



娘に語るお父さんの戦記―小さな天国の話

昭和五十年七月二十日 初版印刷

昭和五十年七月二十五日 初版発行

著 者 水木しげる

発行者 中島隆之

発行所 株式会社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三一六

電話東京(〇三)二九二―三七一一・振替東京一〇八〇二

印刷所 中央精版

製本所 中央精版

©1975

定価はカバー・帯にあります

目次

入	隊	5
最	前線	37
丘	の上	67
土	人部落	87
別	れ	113
戦	後の生活	133
小	さな天国	159
あ	とがき	

娘に語る
お父さんの戦記
——小さな天国の話

入

隊

お父さんが二十歳^{はたち}前の頃は、「戦争」というのがあって、

「ゼイタクは敵だ」

というようなポスターなんかが駅にはり出されており、旅行なんかもあまりできなかった。

「太平洋戦争」という大きな戦争が始まると、結婚式とか正月以外あまり笑う人もいなかったようだったから、お父さんも一カ月に一度位しか笑わないようにしていた。

新聞や町の広場には、

「ほしがりません勝つまでは」

という標語がやたらにはられており、物を欲しがると「国賊」だとのしられる時代だった。なんでも、我慢しなければいけないかった。あまりしゃれた格好をしていると、「国防婦人会」だか「愛国婦人会」だかというのがあって、肩をたたかれ、

「華美な服装は自粛いたしましょう」

とやられる。そまつな格好をして笑わずにあるしていると、「戦時型」ということになるのだろう。誰も文句を言わなかった。

夜は「燈火管制」というのがあって、窓に黒幕をぶら下げ、電球には下だけ照らすようにメガホンみたいなものをかぶせる。そうしないと、敵の飛行機がきて、爆弾を落すかもしれない、ということだった。

うっかりあるくと柱に頭をぶついたりするから、あなぐまかなにかのように、ノソノソとあるく。ラジオをひねると（その頃はテレビはない）、軍歌とか、感心するような話と配給の話ぐらいで、たのしいことはなにつない。

たまに劇があると天皇に忠節をつくす美談ばかり。朝はゲンコッ体操だか建国体操だかというのが町内会に流行し、午前五時になると、太鼓がなり、この太鼓にあわせて、

「ヤー ヤー」

と体操する。朝もボヤボヤ寝てられないし、菓子屋なんか、菓子なんか一つもなく、ただホコリのたまったビンが置いてあるだけだった。

その頃の恐怖は、「赤紙」という魔法の紙だった。これがくると軍隊にゆくことになっていたから、一般の人は、西洋の中世の魔女裁判で「魔女」だと指名されたような恐怖をおぼえたものだ。もっとも、誰も口には出していわなかったが……。

二、三日後も、二、三軒先の家の主人が魔法の紙を受け取って、町内会の人たちに送られて、しょんぼりとどこかへ消えて行ったから、いずれはお父さんにも、赤い鳥でない赤い紙がやってくるだろうと思っていた。

不思議なことには、その「赤い紙」をもらった人を見送る人たちは外見だけかもしれないが、ヤケに元気で、勇ましい歌をうたって見送ったものだ。それはなにもお父さんの町だけではなく、時々汽車に乗ってみると、いたる所で見られることだった。送られる人が青ざめてうつむいているのに、送る人は面白くもない軍歌を大声でうたっていたものだ。

ある日突然、その「赤い紙」がお父さんのところへ舞込んできた。よくみると、「召集令状」と書いてあった。

いつかは赤い紙がくるとは思っていたが、きてみると、ばかに早すぎるような気がした。お父さんが満十九歳の時のことだ。

その頃には、手廻しよく、前から学校を休んで本を読んでいた。別に本を読んだからって、気持よく死ぬるというわけではない。本の中には各人各様の意見があるばかりで、死への解決みないなものはなにも得られないまま、死神レースのスタートに着かせられた感じだった。

おばあちゃん（お父さんのお母さん）たちは、ただオロオロするばかりで、やたらうまいものを食べさせようとするしか方法もないようなふうだった。

別に赤い紙がきたからって妙案もない。だまって従うしかない。赤い紙がきているのに逃げ出したりすると、非国民とか国賊とかいつてののしられ、世間に顔むけができなくされるのだ。オソロシイことだ。

まあ、その頃にくらべると、今の世の中はありがたい。誰がどうして作ったのか知らないが、地獄みたいな世の中だった。

赤い紙がくると入獄、いや「入営」といって、鳥取の連隊に入らなければならなかった。

やがて二、三日すると、町内の人が手に手に旗をもち、たいしてうまいものも食ってないのに、大きな声を出して見送る。当時軍隊に入る人を、氣狂いのようになって送るのが町内のしきりだった。

お父さんと八百屋の手伝いをしていた少年と二人が、町内の橋上でミカン箱を二つ並べた上に立たされた。体には、ナナメに「祝入営」とかいたタスキをかけさせられていた。二人とも墓場にゆくような気持でいたから、ミカン箱の上に立った時は、魔女裁判の魔女に指名された女のような顔色だった。しかし表面は元氣そうにしていた。

元氣のいい町内会長が、ニコニコして、銃後は引きうけたというように、分かったような分からないようなことをいい、お父さんは、

「皆さん、御国のためにがんばってきます」



といった。これは軍隊に入る前にうしきたりだった。手に手に近所の人が旗をもって、大きな声で軍歌である。中には、鯉のぼりまで持ち出しての見送りである。

いまでは信じられないような行事が終ると、やっと汽車に乗せてもらえる。しかし、ここで歓呼の声といって、パンザイを三唱したりしてとてもやかましい。窓からニコヤカに見送りの人に答えなければならぬ。お父さんは、汽車がポーッと行って動き出した時はほっとした。やっと静かになったのだ。

さて、軍隊に入ると、朝がバカに早い。五時頃にたたき起こされ、一日中訓練で、便所にも行けない。とくに大便是、起床の前にすませなければいけない。そうしないと、一週間分の糞を腹の中に入れて走り廻らなければいけないことになる。

お父さんは、朝早く起きるのは苦しいけど、大便をせずに生活するのはなお苦しい。

点呼前に起きて、便所に入って糞をすると、ものすごい大きなのが出かけた。しかも固くて長い。と同時に起床ラッパである。どうやら大切な時計が三十分遅れていたらしい。一週間分の大便が自然に出かかっている。これを切って点呼（朝人員を調べるのを点呼という）にはせつけるべきかしばらく考えたが、お父さんは軍律よりも自然に従うことにした。

営庭にはせつけた時には、班長がまっさおになって、

「番号!!」「番号!!」

をくりかえしている。一人たりないので、脱走したとも思ったらしい。四十八、四十九……。

お父さんは走っていった、

「五十ッ」

といった。一瞬、中隊じゅうがホッとしたように感じられた。

「おい、お前ここへ残っとれ」

点呼後、班長はきびしい顔つきでなぜ点呼におくれたかときいた。お父さんは、細かく、大便の出るさまを語り、

「点呼のラッパが鳴った時あまりにも太いやつで、自分の肛門の力で切ることができず、しかたなく紙で糞をつまんで折りましたが、折ってもまだ五センチ肛門からはみ出しており、内がわに吸いこもうとしましたがどうにもなりませんでした」

と説明した。そういう時だけお父さんは生々とし、身ぶり、手まねで説明した。すなわちそういう時だけおかしい生きがいを感じるのだ。

おそらく半殺しの目にあうだろうと、みんなかたずをのんで見ていたが、班長は百姓だったから、糞には理解があり（昔の百姓は糞を畠にまいていた）、

「そうか」

の一言でゆるされた。

ある時、お父さんが演習から帰ると、枕に魚の絵が書いてあった。

「班長殿これはなんですか。今日タイヤキの配給でもあるんですか」というと、

「魚が水がほしいとよ」

といって笑っている。

「魚が水がほしい？」

「センタクしろということだよ」

といわれた。

なるほど、枕を見ると、お父さんの枕が一番黒かった。

ある日のことだった。脱走兵が出て、兵舎の前に集められた。やたらに脱走兵が出ると連隊長も困るらしく、

「軍隊はそんなに苦しいところではない」

とかなんとかいって、その夜パイナップルの罐詰が配給になった。

今でこそパイナップルの罐詰はなんでもないが、当時はどこを捜しても手に入らぬシロモノだった。今頃こんなものが地上にあったのかと、物干場に出て（兵舎の中で食ったりすると、古兵がいてなにかとウルサイ）、パイカンを食おうとしたが、罐切りがない。めんどろくさいから、